
死神見習い中

神威ガン s

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

死神見習い中

【Nコード】

N0798F

【作者名】

神威ガンス

【あらすじ】

俺は”普通”の人間だ。いたって”普通”。どこにでもいる”普通”の高校生だ。なのに何故……？どうしてこうなるんだ………。俺は”普通”のはずだ。こんなことは俺は絶対に認めない。

プロローグ 『認めない』

俺は皚矢城空。
しろやまじょう

空と書いて『てん』と読む。

どこにでもある、普通の公立高校に通う高校二年生だ。

高校二年生になれば、現実アニメやマンガとは違うとわかる。

幼馴染が可愛い女の子なんてやつは見たことがないし、ましてやその子がバレンタインデーにわざとらしく『義理！！』と、大きくかいたチョコを渡すなんてありえない。

朝、学校に遅刻しそうになった時にパンを銜えた女の子とぶつかったことなんてないし、空から女の子が降ってきたりするなんてものを見たら、迷わず病院へ行くべきだろう。

そんなものはC級アニメの典型だ。

だから俺もあの時に病院へ行くべきだったんだ。

だぶん学校帰りにヤンキーに絡まれて殴られたとき、頭がおかしくなったんだ。

そうじゃなかったらおかしすぎる。

今、俺の目の前には『死神』と名乗る美少女がいる。

ハッキリいおう、「ありえない！」。

これはなにかの陰謀だ。

そうでないなら悪い夢だ。
夢なら早く覚めてくれ。

俺は、断固認めない！！！！

プロローグ 『認めない』（後書き）

さて、新しい作品です。

どうでしょうか？

とはいえ、まだプロローグですからね。

1話を続けて投稿します。

必ず見てみてくださいネ

そしてできれば感想くださいm（　　）m

ではでは、これからよろしくお願いします。

第一話 『出会い』

今日も一日乗りきった。

俺は学校が終わればすぐに帰る。

掃除をするやつ、部活にいくやつ、友達を待っているやつなどいろいろいるが俺はどれにも当てはまらない。

掃除は担当じゃないし、部活にも入っていない。

友達と呼べる人間は………いなくはないが、待つほどではない。

ちょうど今、校門を出たあたりだ。

そろそろ来るはずだが………。

「おい、なんで待ってくれないんだよぉ」

うん、やっぱりここだったか。

こいつは西島栖那。とりしますな

俺の中学時代からの友達だ。

「うむ、我ながら見事なほど計算通りだ」

「は？何言ってるの？」

「いや、こっちの話した」

「ふん」

いつもと同じ、たわいもない会話。

まあ、これでも結構満足してる。

そういえば今日はレンタルCDの返却日だったわけ？
そうだ、返しに行かなければ。

「わるいけど」

と言って、反対方向に行くと言った。ジャスチャーをしてみせる。
レンタルショップは不便なことに、家とは逆方向だ。

「ん？あー、わあ。了解、了解」
「すまん」

長い付き合いだからこれで済む。
あいつは『わるいけど』の、一言で察してくれたようだ。

俺はその後、レンタルショップに行き、CDを返し、また新しいCDを借りる。
そして電車に乗り、家に帰って飯を食って寝る。

……はずだった。

レンタルショップから駅までは結構な距離がある。
だが、近道をすればそうでもない。
わざわざ大通りを通ってでは電車を2本は逃す。

そこで俺は出会った。

……ヤンキーに。

いや、チンピラと言うのだろうか？
そんなことはどうでもいい。

この状況をどうするかが先決だ。

よし、絡まれた時の状況を思い出せばなんとかなるかもしれないな。

- 今から5分ほど前 -

俺がいつも通り抜け道を通ろうとしていたら、その道を塞いでいる集団がいた。

時間がかかってもいい。面倒はいやだ。

当然のごとく俺は方向転換して戻る。

「おいごらあ、なにみとんじゃあ」

見つかった。

ヤンキー（もといチンピラ）のリーダー格の男に声をかけられた。人間の心理だ。一人が絡めば残りの奴らも全員来る。

「んだてめンごらああああッ！！！！いてえめみてえのがごらあああッ！！！！」

「をるうあてめええ、うツてん場合じゃええんあぞおお！！！！」

「んじゃごらあああッ！！！！んとか言つてみiiiiiiii！！！！」

こいつらは最高に日本語を支障しているみたいだ。

まともな日本語は最初のやつだけの専売特許みたいだな。

と、思いつつも、正直意味がわからないから苦笑いをしてしまった。

「んだごらあああッ！！！！なにわらつとんじゃあああ」

「をらあごるうああああ！！！！ぶっこおされてえのかごらあああッ！！！！」

ほんとに何て言っただか…………。

まあ、要約するところだろう。

我々、ヤンキー一同はあなたが見ていたことに大変気分を害しています。

そして、見物料として財布を丸ごと置いて行ってください。

そうしていただければ、あなたの体に害は加えません。

我ながら完璧だな。

まあ、金は持つていなくはないがこんな奴らに渡したくはないな……。

「悪いが、俺は今、金を持っていない。だからここはすまないが……」

そう言つて少しずつ後ろに下がっていく。

これで完璧。

………と、思つたのだが。

『ガシッ!』

「おいごらあ、さり気なく逃げようとしてんじゃねえぞごらあ」

リーダー格の男に肩を掴まれた。

ああ、日本語って素晴らしい。

じゃなかった、さてどうしたものか………。

「調子くれとんじゃねえぞおらああッ!……!」

「んならあごらああッ!……! いてえめみてえんだなごらああッ!……!」

「ぶつとばすんぞごらああッ!……!」

と、その時俺の腹部に痛みが走った。

ああ、殴られたのか。

まあ、それでもいいか…………。

『バキッ』『ドスッ』『ガスッ』『ボカッ』

俺は殴られ続けた。

痛みは伴うが、それで済むならこっちの方がいい。
なんせ一瞬だ。

その時…………。

『シャキッ』

ナイフを取り出したやつがいた。

おいおい、それは笑えないぞ。

「しんねえええーくらあああッ！……！」

いや、それはマジでまずいつ。

マジで死ぬって。

「やめぬか」

女性の声だった。

いや、声質的には女の子かもしれない。
そして、その声が聞こえた直後…………。

『ドンッ』

そんな音と共に光が拡散し、ヤンキー（もといチンピラ）は吹き飛ばされた。

いやいやいやいや。

なんだよこれ。

三流映画かよ…………。

と、思いつつも俺はその光に見とれてしまった。

「あんた、生きてる？」

これが俺と『あいつ』の出会いだった。

第一話 『出会い』（後書き）

さて、どうでしたか？

また一話タイトルが出会いになってしまいました。

なんて言っていないで、どうでしょうか？

まだヒロインもとい死神が出てきてませんね。

予想はできてると思いますが軽くネタばれですね。

では、この作品をよろしく願います。

第二話 『死神の仕事』

「あんた、生きてる？」

これが最初の言葉だった。

生きているとも。

俺は死んでない・・・はずだ。

今ここがああ世じゃないならな。

さて、いったい何が起きたんだ……………。

こいつは誰だ。今のは何だ。さっきのヤンキーはどうなった。何より、俺はどうなった。

「そんないつきに聞かれてもこまるかな」

と、言ってワントンポ置いてから答え始めた。

「あたしは死神。今のはあたしがあんたを助けたの。さっきのヤンキー、って言うの？はあたしがすることをした後に気絶させただけ、あんたは……………どういう意味？」

死神？ワツツ？なんだってんだ。やっぱり俺は死んだのか？死神ってなんだよ。

まあとりあえず……………

「俺は生きているのか」

こう言うのが精いっぱいだ。

声が震えないようにするので忙しいんだよ。

「ああ、そんなことね。それはあたしが聞いたんだけど……。まあ、いいわ。あんたは生きてるよ。うん、死んだまま話してるんじゃないければ、ね」

生きてる？俺は生きてるんだな。

ん？何か重要なことをスルーしている気がするな…………。

そうだ、死神だって？おいおい、ふざけるのも大概にしるよ。

「ほんとよ。だからあんたが生きてるんじゃない。あたしがいなかったらあんた……………ね？」

ね？と言われても困る。

とにかくこいつは危ないようだな。

助けてもらったのはありがたいが、あまり関わらない方がよさそうだ。

「タスケテクレテアリガトウ。オレハイソイデルカラ、ジャアナ」

おもいつきり感謝の気持ちを込めて俺はこう言った。

「あんた、ふざけてんの？」

その通りだと思う。

俺もこんな奴がいたらそう思うだろう。

だがお前の言動の方がふざけてると思うね、俺は。

「あんた、信じてないでしょ？」

信じるも信じないも……………なあ。

ハッキリ言おう、信じられるものか。死神だと？笑えん冗談だ。
……なんては言えないな。この女の言動から考えてどう返される
か想像つくからな。

「いや、信じている。今もさっきも信じているさ」

そう言って駅に出発。

今ならまだ次の電車に間に合うはずだ。

「ちょっと待ちなさいよ。せつかく助けてあげたのに。なんなのよ、
その態度は」

「礼は言っただけだ。それとも金でもとるのか？」

「なっ、あんた馬鹿にしないでよね。あたしはお金なんて取らない
わよ」

ならなんで絡むんだ。

俺はそこまで暇じゃない。……帰って寝る用がある。

「それは用って言わないでしょ。それよりあんた助けてもらったん
だからあたしの仕事手伝いなさいよ」

いや、何を言っているのかわからん。

助けてもらったのと仕事を手伝うのは、いつの間にイコール関係に
なったんだ。

まさか最近の死神はそうやって奴隷を増やすのか？

「違うわよ。ただ助けた礼ってことで人手も足りないし手伝っても
らおうかと思っただけ」

思っただけ、ね。

本当にそうなら『手伝え』なんて言わないと思うけどな。

大体『助けた礼ってことで』なんて普通は助けてもらった側のセリフだと思うが。

たとえどうでも俺は言わないけどさ。

それより、とりあえず聞くことは聞こうか。

「その『仕事』ってのはどんなことをするんだ」

「ああ、簡単よ。ただ人を『寿命通りに死なせる』だけ、よ」

は？

寿命通りに死なせる？

どういうことだ？ まったく理解できん。

「んー、じゃあね、わかりやすくしてあげる。あんたはさっきナイフで殺されそうになったでしょ？ でもそこで死ぬのはまだ寿命の前なの。つまり寿命前に死にそうな人を助けて、寿命より生きている人を死なせるのが『死神』の仕事よ」

説明したやつたわよ。ありがたく思いなさい。

みたいな顔をされても困る。

まあ、とりあえずはわかった。寿命通りに人を死なせるのが仕事ってことだな。

じゃあ病気とかで死にそうな人はどうすんだ？

「ああ、簡単よ。その病気を治せばいいんじゃない」

ああ、そうか。治せばいいのか……。

って、そんな簡単なのか？

じゃあ病気で死なせたりもできるのか。

「まあ、できなくはないけど……。え〜つとね、病気はその人の寿命によるかな。その人がもつと生きるなら治すし、もう直ぐ寿命の人なら死期を伸ばすだけ。それと、死神の力量も関係するわね。力の弱い死神だと、まだ長生きする人の病気を治せないで、何十年も病気のままで過ごさなきゃいけない不運な人もいるわね」

死神にも力量つてのが有るのか……。

ん？そういえば言ってたな。『俺に手伝え』、と。

つてことは俺に人を殺せつてことなのか？

冗談じゃない。俺はこの年で警察に捕まりたくはないぜ。

「なんか勘違いしてない？寿命より早く死ぬことはあっても、長く生きるなんて普通はないの。どちらにしても『普通』の人間は何もすることもなく寿命通りに死ぬけどね」

「だったら死神の仕事なんて必要ないじゃないか」

「もしかしてあんたバカ？う〜ん、聞いた話と違うなあ〜。言ったでしょ？『普通の人間は何もすることもなく寿命通りに死ぬ』ってそれにあんたは今助けられたでしょ？」

『普通の人間は何もすることもなく寿命通りに死ぬ』だと？

じゃあ普通じゃない奴は寿命通りに死なないのか？

しかもあいつが言ったことが本当なら俺は『普通の人間』に該当しないのか？

「そうね。あんたは『普通』じゃあないわ。あんた人生の中で何回死神に助けられていると思う？『普通じゃない人間』の中でも特に『普通じゃない』わ。だから自分の身を守る術を知るためにも仕事を手伝いなさいって言ってるんじゃない。むしろ礼を言われたくらいよ」

俺が『普通じゃない』だって？ホワイ？なんだってんだ。

俺の何が『普通じゃない』ってんだ。

その時、突然体が重くなった。

まさか、あのナイフが刺さっていたのか？

いや、そんな訳は……………。

俺の思考はそこで途絶えた。

第二話 『死神の仕事』（後書き）

さて、皆様どうでしたか？

この話しは主人公と死神の死神に関する話しの話です
空と死神の最初の出会いは唐突でしたね

まあ、この話しは空の意識がなくなることと終わるんですが次からはこれと全然違うタイプ（？）になるので期待していてください

ではでは、これからよろしく願います

第三話 『夢落ち』

「ん……………」

鳥のさえずりがやけに五月蠅く感じる。

俺は……………寝ていたのか？

！！！！

「ここはどこだっ！！！」

忘れていた。

たしか俺はチンピラに絡まれて、死神とか言うやつに助けられた後に……………」

少し話した記憶はあるが内容が思い出せない。

いや、それ以降から今この時までの記憶がない。

そしてここは間違いなく我が家にある俺の部屋だ。

「……………夢？まさか、な……………」

あれが夢だったなんて、な。

でも、いつ俺は家に戻ったんだ？

それに夢ならいつからだ？

「何時だ？」

一言ずつ声に出してみる。

今が現実であると、そう少しでも思えるように。

時計の長針は2と3の間を指していた。

じゃあ短針は？

「6時？」

ここで俺は思った。

やはり俺は混乱（動揺か？）しているようだ。

時間がわかったからって何になるって言うんだ。

重要なのは今日が何月何日か、だ。

すかさず俺はカレンダーを見た。

俺の部屋にはカレンダーが三つある。その中の扉に一番近いやつを見た。

「9月3日？昨日と同じ日にち……………なのか？」

どういうことだ。

やはり夢だったのか？

つまり昨日ではなく、今日？

ってことは……………。

「……………あれは夢、か。よかったあ」

無意識にそう言葉が出た。

唯一残念な点があるとすれば、またCDを返しに行かなければいけないということだな。

なんてくだらない事を考えている間に今の時間はもう6時35分。

「起きるか」

俺は起きることにした。

学校までには、まだ時間があるけど、二度寝何てしたら確実におきれないからね。

「制服にでも着替えるか」

起きるなら着替えるか。

また部屋に戻るのも面倒だしな。あと鞆も、か。

現在時刻は6時47分。

うん、ぴったりだ。

「おはよう」

妹がいるだろうキッチンに向かってそう言う。

「あれえ？空、起きるの早いねえ」

この変な喋り方をするのは俺の妹、皚矢城香向だ。しろやぎこなた

俺と同じ高校に通っている、ごく『普通』の女子高校生だ。

まあ、俺と違いまじめだけどな。たしか生徒会役員をしていたはずだ。

「ああ。なんか目が覚めてな」

「怖い夢でも見たのお？」

「この年で夢なんて見ないよ。それより飯は？」

ピンポイントじゃねえか。

正直、少し焦った。なんて感が鋭いんだ。

「夢見るのに年なんて関係ないよお。あ、ご飯はもうできてるけど

お……………食べる？」

「ああ、頼む」

うちは香向が全ての家事をしている。

母は俺が小さい頃に病死。父は仕事。のはずだ

だから香向が家事をすることになっている。

父はもう1年は帰って来てない（生活費は毎月送られて来ているけど）。

でも、不自由だなんて思っていない。俺と香向だけで十分満足している。

なんて考えている間に目の前にトーストと目玉焼きが出てきた。

「お待ちどうさまあ。今日は起きたの遅くて、ごめんえ」

「いや、いいさ。作ってもらえるだけでありがたいつてもんだ」

「空、私もう出るからねえ。今日は生徒会の仕事があるんだあ」

「ふん。まあ、頑張れよ」

「うん。じゃあ、行つてきまあす」

そう言つて玄関に向かい、家を出た。

「俺も飯食つたら行くか」

『普通』の日常。

これが俺の『いつもの』日常だ。

あんな夢を見た後だからすごくありがたく感じるね、ほんと。

それにしても、変な夢を見たな……………。

アニメとかだとあの女（死神の）が転入生として出てくるって感じだよな。

まあ、これは現実だけだな。

「さて、学校行くか」

飯を食べ終わり、学校に行く準備（と言っても靴を履くだけ）を始

めた。

うちの学校の瑠璃色の制服がとても目立つ。

この時間は人が多いみたいだな。

学校までは歩きだ（時間がない時は自転車だが）。

一人で学校行くのも久々だな。

なんて考えていたら俺は不意に声をかけられた。

「空君、今日は早いですね」

うちのクラス委員の美月瑞希だ。みつきみずき

苗字と名前が同じ（書くときは別）の珍しいやつだ。

「ああ、急に目が覚めてな」

「よかったです。これから急にも急に目が覚めて下さいね」

「おいおい、無理言うなよ」

「ちなみにこの時間が『早い』に該当するのは空君だけですよ」

「なっ、俺だって急いでいるんだ。けど気づいたら時間が………」

これが『普通』の会話。

やっぱありがたいね、うん。

瑞希と話していたらもう学校についていた。

そして教室に入ったとき、俺は『異常』に気づいた。

第三話 『夢落ち』（後書き）

さて、どうでしたか？

夢落ちと言うあたりきたりのパターンですが、これは布石です
まあ、違ったらすぐくぐらない話ですが

それでも次話やほかも物語との関連性を高めるために必死です

何度も何度も書き直して……………

でも、他の物語との関連はまださきですネ

期待しててくださいネ

それでは、これからもうろしく願います

第四話 『転入生は・・・』

俺は『異常』に気づいた。

「なんで……………これしかないんだ」

明らかに生徒の数が少ない。

教室に居るのは、3人。

今来た俺と瑞希、それにクラスメイトの美倉絵美理^{みくらえみり}だけだ。
な〜んてな。

確かに生徒の数は少ないが、別に異常じゃあないだろ。
たまたま遅いか……………。まあ、何だろうと美倉に聞けばいいんだし
な。

なんて考えている所へ美倉は話しかけてきた。

「あつ、瑞希と空じゃん。空今日は早いね。ところで、二人は職員
室の前通らなかつたの？」

「なんで朝からそんな縁起の悪いとこ通らなきゃいけないんだ」

「うん、すぐく同意する。てことは通らなかつたんだね」

「で、職員室でなんかやってるのか？抜き打ちの通った者順テスト
とか」

軽く笑い口調で言ってみた。

普通に考えて何もなかったらこんな話題は振られない。

まあ、たいしたことじゃないだろうけどさ。

「ああ、やつぱこの人数は気になった？原因は転入生だつてさ。そ
れも超美少女。だからこれしか居ないみたい」

「お前は行かないのか？みんなが行くほどの美少女なんだろう？」

「ああ、あたしそういうのパス。興味ないから」

「まあ、だろうな」

「それに、うちのクラスらしいよ。だったら見に行かなくても見られるじゃん」

「うちのクラス？人数的に3組じゃないのか？」

うちの学校は人数が一番少ないクラスに転入生を入れるようになっている。

もともと少ない3組は、生徒が2人も転校したから一番少なく、転入生は3組のはずだった。

「わかんないけど私が聞いた話だとうちのクラスらしいよ」
「ふーん。まあ、どうでもいいけど」

転入生か…………。

まさか、ね。

マンガじゃないんだからさ。

だいたいそんな美少女って程じゃなかったはずだ。

それにあれは夢だったんだ。日にちだって戻ってるんだし、間違いない。

なんて考えながら話していたら、予鈴が鳴り、転入生を見に行っらしい生徒が一気に戻ってきた。

その中の一人、栖那が俺に話しかけてきた。

「んお、空？予鈴前からいるなんてなんかあったのか？」

まったく、どいつもこいつも…………。

俺が早く来ると皆そう思うのか？

言っとくが俺は遅刻をしたことはないぞ。

「わかってるよ。でもお前いつもギリギリじゃん」

そう言われると言い返せない自分が悲しい。

「てか転人生の話聞いたか？すつつつづけえ美少女だったぞ」

なんだそのタメは。

そんなに『っ』をつけなくても美倉から聞いたさ。まあ、お前には縁がないだろ。

「なっ、俺だって頑張ればなあ……………」

なら、頑張ってくれ。

まあ、モテルやつは頑張んなくてもモテルだろうがな。

そんなことより、今、俺が確認したいのは

「転人生がうちのクラスつてのは本当か？なんで3組じゃないんだ？」

「結構知ってんなあ……………。なんか『前の学校で4組だったからどうしても4組がいい』ってその転人生が言ったらしいぞ」

「なんだそりゃ」

「知らねえよ。俺だって聞いた話だから、事実かどうかも怪しいしな」

「ふゝん。あっ、そろそろ時間だな」

「ん？ああ、もうそんな時間か」

俺たち担任は絶対に遅刻しない。

しかもスポーツ系の（確かラグビー）タイプの人間で怒らすと怖い。おこると怖いくせに、短気。なんて迷惑な。

ガラガラ

景気よく、扉が開く音がする。そして、それと同時に本鈴が鳴る。もしかしたら本鈴が鳴ってから扉が開いたのかもしれない。つまり同時ってことね。

「席着けえ。って着いてるか。んじゃあHR始めるぞあ」

みんな担任の、チャイムと同時に突入攻撃に慣れたようで、席に座っているようだった。

「んじゃあ、みんな知ってると思うが大事な連絡がある」

『来た！』みないな顔を生徒のほとんどがしている。

栖那がムカつく顔をしている。体育のサッカーの時間にスライディングしようなんて思っ
てないぜ。ホントに。

「あー、みんな知ってるか……。まあ、いいか。知つての通り転入生だ。入ってくれ」

『知つての通り転入生』って適当だな……。
なんて思っていたら本鈴後、二度目の音が教室に響いた。

ガラガラ

その音の後に教室に入ってきたのは言うまでもなく転入生だ。
そして黒板に自分の名前を書いた後、生徒側を向いて、自己紹介。
まあ、基本だね。

「今日からこの学校でお世話になる長谷部紅美です。よろしくお願

はせべくみ

います」

俺のこの落ち着き具合で分かってくれるだろうか？

やはりというか、当然というか、あの女ではないようだ。

だが、俺は1つ気になる。そこまで美人には見えない。

いや、可愛くないって訳じゃないんだが……。

なんて言うか、生徒のほとんどが見に行くほどじゃあないかと思える。

人違いって訳じゃあなさそうだ。周りの生徒の顔がそう言っている。

「あー、席はあそこの休みの生徒の席に座ってくれ。明日には席を用意しておく。それと、わからないことがあったら言ってくれ。まあ、うちの学校は何も特別のことはないけどな」

そう言っただけは軽く笑った。

普通最初に用意しておくだろ。まあ、これが担任曰く、ラグビークオリティだな。

かなりいらぬクオリティだ。

ちなみに、当然ながら転入生の席は俺の隣なんかじゃあない。

俺の席の近くは間違はなく満席だ。誰も入りようがないね。まあ、多少残念なのはこの際忘れよう。

でか、今うちの担任、学校にケチつけなかったか？

「あー、それとだなあ……。あー、……。お前ら聞け、成績落とすぞ」

担任岡部のこの一言で教室は静まり返る。後半のそのセリフは教師としてどうなんだ？

「実は転入生はもう一人いるんだが……。あー、確かトラブルで

遅れるそうだと。来たなら紹介するから、そのことも頭に入れておくように」

生徒がそうとう驚いているようだ（当然俺も、な）。

それもそうか、美少女転入生（正直俺はそう思っただけが）が来たと思っただら、まだいるなんて、これはたとえば孔子だろうと取り乱すさ。

「あー、時間だ、HR 終わりい。各自、次の授業の準備を怠らないように。以上、号令」

クラス委員の号令が言い終わったところで転入生、長谷部紅美を多数の生徒が取り囲んだ。

あ、誤解を生まないように言っておくが、別に襲うわけじゃない。

お決まりの質問攻めだろう。

人数がやたらと多いと思ったら、他のクラスの連中までいやがるぜ。ご苦労なこった。

俺は………寝る。早く起きたせいでやたらと眠い。

そして、俺が夢の中に突入するには、そう時間がかからなかった。

第四話 『転入生は・・・』 (後書き)

さて、転入生です

そしてまさかの無関係

でも、もう一人いるみたいですけど

いや、でも正直完全に無関係だと進まないですけどネ

さて

それではこれからも『死神見習い中』をよろしく願います

第五話 『悪夢の二人目』

俺は寝ていた。それは間違いのないことだ。今は……………3時限目の休み時間か。

結構寝たな。いや、それより俺が寝ている間に何があったんだ？それともまた夢なのか？

どうして……………。

なぜあの女が俺の目の前にいるんだ！？

空が寝ている間の出来事

3時限目はLHRだった。

そしてLHRをしている途中に廊下から他の先生が来て、担任岡部を呼んだ。

数分して担任岡部は戻って来た。もう一人の転入生を連れて。

「あー、朝に言っていた転入生の子だ。あー、じゃあ自己紹介してくれ」

そう言われ『もう一人の転入生』は軽くお辞儀をして、自己紹介を始めた。

「今日からこの学校でお世話になる神来弥来じんらいみこです。よろしくお願

します」

そう言つて、また軽くお辞儀をした。

「あー、席は……流石にそこまで休みはいないか。今後ろに机を持っていくからちょっと待っていてくれ」

「あたし、席あそこがいいんですけど……ダメですか？」

「あー、別にいいが……。栖那！自分の席取りに行つてこい」

「なつ、えー！俺が自分で取りに行くんですか？先生が逝つて来てくださいよ」

「今、『行つて』のニュアンスが違かつた気がしたんだが……」

「き、気のせいですよ。わかりました。取ってきますよ」

「よし、行つてこい。あー、隣の席の……あの馬鹿はいつから寝てた」

「朝のHRの終わりからずっと寝てました」

「まあいい。なんかあつたら隣の馬鹿じゃない方に聞いてくれ。以上」

そう言つたと同時に終了のチャイムが鳴る。

そして今

「ねえ、あんた起きなさいよ」

おもいつきり机を蹴られた。何より俺は起きている。

「なら返事くらいしなさいよ。それより、ちよつと来て」

そう言い終わつたかどうかというところで、俺は引っ張られていっ

た。

ここは……。ああ、屋上か。
屋上は使用禁止だと思ったが。

「そんな人間が決めたルールなんて知らないわ。それよりあんたに聞きたいことがあるの」

俺に聞きたいことねえ。悪いがスリーサイズには自信ないぜ。

「バカ、そんなことじゃなくて。あんたにもわかるように簡単に言うわ。『あの女』はなに？」

「は？」

思わずそう声が出ていた。きっとこれが条件反射ってやつだね。

「『あの女』って……。どの女だよ」

「あんたバカ？『あの女』っていつたら『あの女』でしょ？」

こいつ馬鹿か？中学の時にこういう馬鹿がいたな。

自分が分かったことは全員分かっていと思い込むやつ。そしてそれを前提にして話を進める。つまり自己中だ。

「悪いが俺にはお前が言う『あの女』の意味がわからん。てか、疑問に思うなら本人に聞きに行つてこい」

「それができないからあんたに聞いてんでしょ？あつ、あんた今ないんだった。忘れてた……。じゃあ伝わらないじゃない！」

俺の頭はここにきて正常に動き始めたのかもしれない。

何でこの女がいるんだ？

あれは夢だったじゃないか。それにこの女、『人間が決めたルール』

とか言ってたな。

マジでこの女、死神なのか？

いや、そんなこてや…………。

とりあえず、聞かないとわからない、か。

「なんでお前がここにいるんだ？あれは夢じゃなかったのか？」

「あんた本当にバカじゃない？あれは現実。わかる？げ・ん・じ・つ」

馬鹿にバカと言われると無性に腹が立つな。

いや、そんなことはいいんだ。（実際はよくないが）

あれは現実だと？

じゃあ何で日にちが戻っているんだ。

「あれはあたしがしたの。あんた死にそうだったし。いや、あの時ナイフが刺さってたなんて予想外よ」

ナイフが刺さってた？

いや、それよりお前がしたって…………何のためにだ。

「あんたの怪我を治すのがメンドウだったから。時間戻した方が楽だし」

時間を戻す？

……………。
時間を戻す！？

そんなことができるのか？

「できるからしたんでしょ？実際あんたも体験してるし」

じゃあナイフってどういうことだ？あの時刺さってたのか？
いや、俺は確認したはずだが……。

「ああ、あたしが言ってるナイフはあんたには見えないよ。うん」

『うん』ってなんだ、『うん』って。

それより俺には見えないって何故だ？

大体痛みも感じなかったぞ。

「簡単よ。力がないから。痛みが感じなかったのは……そうなる
『力』でも働いてたんじゃない？気付かないように、とか」

その『力』ってのはなんだ？なんかの能力みたいなもんか？

「まあ、そうね。そんなことよりあの女……じゃなかった。あた
しともう一人、転入生がいたでしょ？あれよ」

「あの転入生がどうしたんだ？」

確か名前は……覚えてないな。
とにかく美少女いしづってのは覚えてる。

「そうその女。そいつは……。ううん、あんたに絡んできた……
…ヤンキーだっけ？まあ、その1人と同じ『もの』よ」

『もの』だと。人じゃなくて、か？そりゃあなんだ？

「そう『もの』。まあ、正しくはその『もの』が憑いてる、かな」

第五話 『悪夢の二人目』（後書き）

更新がすごく遅くなってしまいました
申し訳ないです

見てる人がいればですけど……

さて、そんなことより

今回は微妙な終わり方ですが気にしないで下さい
それでも、何とか話が続いて行きそうですね

それでもは

これから『死神見習い中』をよろしく願います

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0798f/>

死神見習い中

2010年10月14日17時57分発行